

次の文章は、横光利一「花園の思想」の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

丘の先端の花の中で、透明な日光室が輝いていた。^{*}バルコオンの梯子は白い脊骨のように突き出ていた。彼は海から登る坂道を肺療院の方へ帰って来た。彼はこうして時々妻の傍から離れると外を歩き、また、妻の顔を新しく見に帰った。見る度に妻の顔は、明確なテンポをとって段階を描きながら、克明に死線の方へ近寄っていた。——山上の煉瓦の中から、不意に一群の看護婦たちが崩れ出した。

「さようなら。」
「さようなら。」
「さようなら。」

退院者の後を追って、彼女たちは陽に輝いた坂道を白いマントのように馳けて来た。彼女たちは薔薇の花壇の中を旋回すると、門の広場で一輪の花のような輪を造った。

「さようなら。」
「さようなら。」
「さようなら。」

芝生の上では、日光浴をしている白い新鮮な患者たちが坂に成った果実のように累々として横たわっていた。

彼は患者たちの幻想の中を柔かく廊下へ来た。長い廊下に添った部屋部屋の窓から、絶望に光った一列の眼光が冷たく彼に迫って来た。彼は妻の病室のドアを開けた。妻の顔は、花弁に纏わりついた空気のように、哀れな朗かさをたたえて静まっていた。

① 恐らく、妻は死ぬだろう。
彼は妻を寝台の横から透かしてみた。罪と罰とは何もなかった。彼女は処女を彼に与えた満足な結婚の夜の美しさを回想しているかのように、端正な青い線をその横顔の上に浮べていた。

彼と妻との間には最早悲しみの時機は過ぎていた。彼は今まで医者から妻の死の宣告を幾度聞かされたか分らなかった。その度に彼は医者を変えてみた。

彼は最後の努力で彼の力の及ぶ限り死と戦った。が、彼が戦えば戦うほど、彼が医者を変えれば変えるほど、医者の死の宣告は事実と一緒に明克の度を加えた。彼は萎れてしまった。彼は疲れてしまった。彼は手を放したまま呆然たる蔵のように、虚無の中へ坐り込んだ。そうして、今は、二人は二人を引き裂く死の断面を見ようとしてただ互に暗い顔を覗き合せているだけである。丁度、二人の眼と眼の間に死が現われでもするかのよう。彼は食事の時刻が来ると黙って匙にスプーンを掬い、黙って妻の口の中へ流し込んだ。丁度、妻の腹の中に潜んでいる死に食物を与えるように。

あるとき、彼は低い声でそつと妻に訊ねてみた。
「お前は、死ぬのが、ちよつとも怖くはないのかね。」
「ええ。」と妻は答えた。

「お前は、もう生きたいとは、ちよつとも思わないのかね。」
「あたし、死にたい。」

「うむ。」と彼は頷いた。

二人には二人の心が硝子の両面から覗き合っている顔のようにはつきりと感じられた。

今は、彼の妻は、ただ生死の間を転っている一匹の怪物だった。あの激しい熱情をもつて彼を愛した妻は、いつの間にか尽く彼の前から消え失せてしまっていた。そうして、彼は？ あの激しい情熱をもつて妻を愛した彼は、今は感情の擦り切れた一個の機械となっているにすぎなかった。実際、この二人は、その互に受けた長い時間の苦痛のために、もう夫婦でもなければ人間でもなかった。二人の眼と眼を経だてている空間の距離には、ただ透明な空気だけが柔順に伸縮しているだけである。その二人の間の空気は死が現われて妻の眼を奪うまで、恐らく陽が輝けば明るくなり、陽が没すれば暗くなるに相違ない。

② 二人にとって、時間は最早愛情では伸縮せず、ただ二人の眼と眼の空間に明暗を与える太陽の光線の変化となつて、露骨に現われているだけにすぎなかった。それは静かな真空のような虚無であった。彼には横たわっている妻の顔が、その傍の葉台や盆のように、一個の美事な静物に見え始めた。

彼は二人の間の空間をかつての生き生きとした愛情のように美しくするため

に、花壇の中からマーガレットや雛罌粟をとって来た。その白いマーガレットは虚無の中で、ほのかに妻の動かぬ表情に笑を与えた。またあの柔かな雛罌粟が壺にささって微風に赤々と揺らめくと、妻はかすかな歎声^{なげき}を洩して眺めていた。この四角な部屋に並べられた壺や寝台や壁や横顔や花々の静まった静物の線のなかから、かすかな一条の歎声^{なげき}が洩れるとは。彼は彼女のその歎声の秘められたような美しさを聴くために、戸外から手に入る花という花を部屋の中へ集め出した。

薔薇は朝毎に水に濡れたまま揺れて来た。紫陽花と矢車草と野茨と芍薬と菊と、カンナは絶えず三方の壁の上で咲いていた。それは華やかな花屋のような部屋であった。彼は夜ごとに燭台に火を付けると、もしかしたらこっそりこの青ざめた花屋の中へ、死の客人が訪れてはいはしまいかと妻の寝顔を覗き込んだ。すると、或る夜不意に妻は眼を開けて彼にいった。

「あなた、私が死んだら、幸福になるわね。」

彼は黙って妻の顔を眺めていた。そして、彼は自分の寢床へ帰って来ると憂鬱に蠟燭の火を吹き消した。

彼は自分の疲れを慰めるために、彼の眼に触れる空間の存在物を尽く美しく見ようと努力し始めた。それは彼の感情のなくなった虚無の空間へ打ち建てられるべきただ一つの生活として、彼に残されていたものだった。

彼は彼の寢床を好んだ。寢床は妻の寝室と同じであるとしても、軽症者の静臥すべきベランダにあった。ベランダは花園の方を向いていた。彼はこのベランダで夜中眼が醒める度に妻より月に悩まされた。月は絶えず彼の鼻の上におらさがったまま皎々として彼の視線を放さなかった。その海の断面のような月夜の下で、花園の花々は絶えず群生した蛾のようにほの白い円陣を造っていた。そうして月は、その花々の先端の縮れた羊のような皺を眺めながら、蒼然として海の方へ渡っていった。

そういう夜には、彼はベランダからぬけ出し夜の園丁のように花の中を歩き廻った。湿った芝生に抱かれた池の中で、一本の噴水が月光を散らしながら周囲の石と花とに戯れていた。それは穏かに庭で育った高価な家畜のような淑やかさをもっていた。また遠く入江を包んだ二本の岬は花園を抱いた黒い腕のように曲っていた。そうして、水平線は遙か一髪の光った毛のように月に向って膨らみながら花壇の上で浮いていた。

こういふとき、彼は絶えず火を消して眠っている病舎の方を振り返るのが癖である。すると彼の頭の中には、無数の肺臓が、花の中で腐りかかった黒い菌のように転がっている所が浮んで来る。恐らくその無数の腐りかかった肺臓は、低い街々の陽のあたらし屋根裏や塵埃溜や、それともまたは、菌車の噛み合う機械や飲食店の積み重なった器物の中へ、胞子を無数に撒きながら、この丘の花園の中へ寄り集って来たものに相違ない。しかしこれらの憐れにも死に逝く肺臓の穴を防ぎとめ、再び生き生きと活動させて巷の中へ送り出すこの花園の院長は、もとは、彼の助けているその無数の腐りかかった肺臓のように、死を宣告された腐った肺臓を持っていた。一つの傷ついた肺臓が、自身の回復した喜びとして、その回復期の続く限り、無数の傷ついた肺臓を助けて行く。これが、この花園の中で呼吸している肺臓の特殊な運動の体系であった。

(注) バルコオン…バルコニー。

問一 — 線a~cの表現の本文中における意味内容として最も適当なものを次の各群のA~オから一つずつ選び、記号で答えよ。

- | | | | |
|---|------------|---|------------|
| a | 崩れ出した | ア | 列を乱して走り出した |
| イ | 思い思いに歩き出した | イ | だれもが泣き出した |
| ウ | 顔を崩して笑い出した | エ | ばらばらに駆け出した |
| オ | | | |

b 累々として
ア ばらばらに散らばって
イ 鮮やかにくつきりと
ウ じつと動かずに
オ 積み重なるように
どこまでも延々と

c 皎々として
ア しつこくつきまとい
イ 白々と明るく
ウ 静まりかえって
エ 身じろぎもせず
オ 淡い光を寄こして

問二 — 線① 彼は妻を寝台の横から透かしてみた。罪と罰とは何もなく
た。彼女は処女を彼に与えた満足な結婚の夜の美しさを回想しているかの
ように、端正な青い線をその横顔の上に浮べていた」とあるが、「彼」の心
情の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 死にそうになった妻が、哀れな表情から幸福な表情へと顔の様子を変
えたことに対する驚き。
イ 死の差し迫った妻に、彼を責める様子が見られないことに対する拍子
抜けした気持ち。
ウ 死ぬと思われる妻に、二人のこれまでの関係によるしこりなどが見ら
れないことを確認した安心感。
エ 死んでゆく妻が、これまでの結婚生活に満足した顔をしているように
見えたことに対する得意な気持ち。
オ 死の床にあつて生きることをあきらめた妻が死を少しも怖がつていな
いことを知って満足する気持ち。

問三 — 線② 二人にとって、時間は最早愛情では伸縮せず、ただ二人の眼
と眼の空間に明暗を与える太陽の光線の変化となつて、露骨に現われてい
るだけにすぎなかった」とあるが、これはどういうことか。その説明とし
て最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 時間は、物理的、規則的に過ぎるだけで、二人の心の中で長く感じた
り短く感じたりすることはないということ。
イ 時間は、それ自体としては価値のないものであるが、二人の心の持ち
方によっては価値を生むものであるということ。
ウ 時間は、二人に平等に流れており、一方に有益な時間を与え他方に無
益な時間を与えるものではないということ。
エ 時間は、二人の関係を徐々に明らかにする力を持ち、人間には手出し
ができないものであるということ。
オ 時間は、最早愛情で結ばれていない二人にとっては無意味で、止まっ
ているのも同然であるということ。

問四 — 線③ 「青ざめた花屋」とあるが、これは具体的にはどうか。
その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア この病室は、花屋に似ているものの、花屋に来るような客の訪れがな
いということ。
イ この病室は、花屋のようではあるが、花屋本来が持っている生気がな
いということ。
ウ この病室は、花屋にそっくりではあるが、花屋に匹敵する美しさはな
いということ。
エ この病室は、花屋と同じと言ってよいが、花屋の華やかさとは質が違
うということ。

オ この病室は、花屋のごとく華やかではあるが、彼の心は憂鬱であるということ。

〔 〕

問五

——線④ 彼はこのベランダで夜中眠が醒める度に妻より月に悩まされた」とあるが、「彼」が「月に悩まされた」のはなぜか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 月が、美しいはずの花園を不気味に照らし、彼の心に死のイメージをかきたてたから。

イ 月の生気のなさが、妻の生気のなさよりも上回っているように彼には感じられたから。

ウ いつ目がさめても月が輝いているので、妻の安眠の妨げになると思ったから。

エ 月の規則的な運行が、死にゆく妻にさらなる苦痛を与えるのではないかと心配したから。

オ 明るく輝く月の光が彼の顔を照らし続けたので、まぶしくて安眠を得ることができなかったから。

〔 〕

問六

——線⑤ この花園の中で呼吸している肺臓の特殊な運動の体系」とあるが、「肺臓の特殊な運動の体系」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 結核にかかり、それを肺療院で治し、また世の中に戻ってゆく結核患者のサイクル。

イ 死を宣告されて絶望するが、やがて回復して喜びに変わってゆく結核患者の心の仕組み。

ウ 結核にかかるが、それを防ぎ止め、健康なものにしてゆくという、肺臓が持っている仕組み。

エ 肺を病んだ患者たちが結核菌を撒き散らしながら、新たな患者を作り出すという仕組み。

オ 結核から助かった院長が、今度は結核患者を助けて世の中に送り出してゆくというサイクル。

〔 〕